

No.136

2001

12.31

# 岐阜の博物館

編集兼発行

〒501-3941 関市小屋名  
(岐阜県百年公園内)

岐阜県博物館内

岐阜県博物館協会

TEL 0575-28-3111

振替名古屋637909

まるほん

## 本すりばち館のこと

本すりばち館館長 加藤明子



地主で大学教授の父、  
大学時代からバイオリンを弾き油絵を描いていた母、商売とか、事業とか全く無縁の環境で育った私が、すり鉢製造の窯元に嫁ぎました。それまで陶器の焼成窯など見たこともなく、エンブロ（焼成時

に使用するサヤ）やモロ（作業場）などという窯言葉すら全く知らず、慣れない仕事、窯ぐれ（窯場で働く人）の荒々しい言動に戸惑うばかりでしたが、何年か経つと、家族全員が同じ焼物という目標に向かって力を合わせ働くことに楽しさを覚えるようになりました。窯屋へきてから三十数年たった頃、モロも老朽化したので取り壊すという話が持ち上がりました。初代の苦勞と努力がつまり、家族と窯ぐれ達の汗と涙の染み付いた、戦前からのモロや窯、煙突をどうしても21世紀に残したいと思うようになり、また、二代目が固く鋭く美しいクシ目を引くために改良を重ねた道具は、企業秘密であったのですが、そんな大事な道具を一般公開しても構わないという言葉も貰い、今では懐かしくなった貴重な品々を公開する資料館の設立を思い立ちました。ただ、開館にあたり、すり鉢屋のおかみさんである私がすり鉢のことを全然知らないことに気づき、文献を読んだり、古いすり鉢を捜して各地を回り、また知り合いにすり鉢を送ってもらったりもしました。この調査の中、南米のペルーに日本の東播磨で焼かれたすり鉢と同じような古いすり鉢（こちらは石製）が存在していたことを知り、驚いたりもしたものです。（ペルー・天野博物館所蔵）

甕、壺とともに三種の台所用品として日本

の食文化には欠かせない重要な道具として活躍してきたすり鉢は、10世紀の後半から日本各地で焼かれていました。最初の頃はクシ目もなく、荒い土で焼かれた「鉢」がすり鉢として使用されていたようでした。クシ目が引かれるようになったのは13世紀以降で、この頃のすり鉢は、底が平らで、クシ目も竹串で引いたような粗い線が数本ある、無釉の焼締で焼成したものでした。全体にクシ目が引かれたのは江戸時代からで、現在のように底から上部まできれいにつながったクシ目が引かれ、アメ釉も施されているすり鉢は、明治後期からです。本では、明治の頃からすり鉢製造を始めました。クシ目を引く道具も、鋼で鋸の様な刃を当主が手作業で作り、クシ目を引くのも手作業です。原料は磁器土に固く引き締まる陶土を混ぜ1300℃の高温で焼成しています。

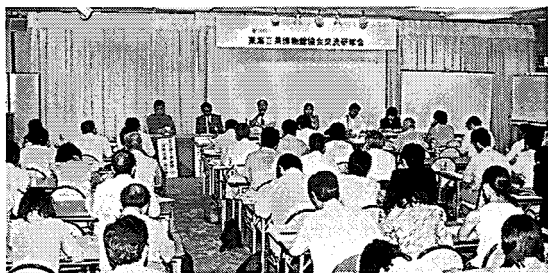
本すり鉢館には、古いすり鉢、日本各地のすり鉢、クシ目の移り変わりの様子、企業秘密であったクシ目を引く道具、温度計などの窯道具も展示しています。また、館長の私は、陶芸の公募展や日展に入選、入賞したりしておりますので、そうした作品も展示させていただきます。

開館して一年、全国から多勢の方においで頂き、古い窯屋の雰囲気をつぶりに残した建物、窯、煙突など皆様から好評を得ています。来館された皆様のご要望を取り入れ、館内ですり鉢の成型、クシ目を引く作業が見学できるようにもなりました。館内の窯の前でコンサートを開催したり、窯元の跡継ぎの青年の集い、女性の集いなども行っており、展示のみならず、地域の人々とのふれあいの場ともなっています。今後も地元の方々、来館者の皆様とともに地域に密着した本すり鉢館として大切に育てていきたいと思っています。

# 「第26回東海三県博物館協会交流研修会の報告」

日時：平成13年8月2日(木)～3日(金)  
会場：三重県伊勢市 伊勢シティホテル

参加：103名



本年度はテーマの「博物館と学校」に合わせて時期を変更、8月に三重県において開催され、岐阜県から13名、愛知県から21名、三重県から46名の参加のほか、博物館実習生や学校教員23名の参加があった。

第1日目 8月2日(木)の日程

事例発表 テーマ「博物館と学校」

～総合的な学習の時間の事例から～

## 1 愛知県「学校と美術館」

～組織作りを中心に～

名古屋市美術館 学芸係長 神谷浩氏

## 2 岐阜県「学校と博物館との連携で行う 野外学習における自然認識の実践事例」

岐阜県博物館 自然担当課長補佐

井上好章氏

## 3 三重県「博物館でしか分らない 地域の文化」

地域文化

長島町輪中の郷 主査 諸戸靖氏

## 4 学校からの事例

津市立南立誠小学校教諭

新富美子氏、廣崎元昭氏、細川典子氏

全体意見交換会、情報交換会(懇親会)

第2日目 8月3日(金)の日程

博物館施設見学

## 1 平成13年度三重県移動博物館見学

## 2 鳥羽水族館見学

## 3 真珠博物館見学

研修会要旨

「学校と美術館～組織作りを中心に～」

学校との連携の具体的な方法(パッケージコースの作成、アートカードの作成)のほか、文部科学省委嘱事業の「親しむ博物館づくり事業」における学校プログラム作成に関する事例、博物館と学校(教員)との接点の重要性について報告を受ける。

「学校と博物館との連携で行う野外学習に  
おける自然認識の実践事例」

博物館周囲の公園を使用して、学校からの要望で自然体験講座を頻繁に開催している事例を紹介。また、県立博物館として、県域どこまで小中学校がカバーできるかという問題、学校教員向け研修などの難しさ(時間的な問題)などの課題について報告を受ける。

「博物館でしか分らない地域の文化」

町立の資料館としてのあり方や体験教室を重視した、地域の保育園、幼稚園、小学校との関わりなどについての事例を紹介。また、実際に教科書だけでは分かりにくい「輪中」について先生達に博物館への見学を呼びかけたり、博物館が主体となった副読本作りなどの提案を受ける。

「学校からの事例」

津市立南立誠小学校の「総合的な学習の時間」の授業の組み方やどういう狙いで博物館を利用するようになったかなどを、学校の視点から報告。また、博物館を通じて学んだことについての子供達の報告、学校のチラシでの博物館教室の紹介など連携のあり方について報告を受ける。

「全体意見交換会」

- ・出前授業のニーズとその費用について
- ・先生などの指導者を対象とした研修会の実施
- ・岐阜県「みのかも文化の森」が実施している学校との連携の事例
- ・「総合的な学習の時間」において、博物館へ出かける際の課題(時間、距離、給食の時間などの問題点)
- ・遠方にある博物館に対して、学校が「総合的な学習の時間」で訪れることが出来るか否か?

「博物館施設見学」

三重県博物館が主催する移動博物館を見学後、鳥羽水族館ではバックヤードなどの様子を、真珠博物館においては実際に真珠が出来るまでの行程について見学するなどし、博物館の裏側から見た飼育業務、管理運営業務などについてのあり方について学ぶ。

### 第50回岐阜県博物館協会会員研修会報告

「地域からはばたく博物館活動のあり方」

期 日：平成13年9月19日(水)～20日(木)

場 所：光記念館 等

講 師：木村榮寿氏 / 吉井隆雄氏

参加者：27名



木村氏



吉井氏

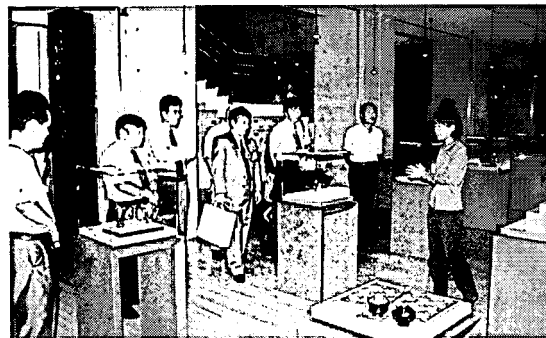
まず、平成13年7月にオープンした飛騨・世界生活文化センターの展示施設、「ミュージアム温故知新」について研究課長木村榮寿氏から講演していただきました。展示の概要や開館にいたるまでの経緯をOHPと様々なエピソードを交えて説明されました。

次に光記念館学芸員吉井隆雄氏より光記念館の収蔵庫システムとIPM（総合防除管理）の取組について講演していただきました。文化財を虫菌害から守るため、収蔵庫などハード面の充実だけでなく、常日頃から学芸員をはじめ博物館職員が文化財保存の意識を高めて対応する必要性を感じました。そして、実際に最新型収蔵庫や太陽エネルギーを活用した施設内のシステムを案内していただきました。普段なかなか入ることのできない大規模な博物館の舞台裏を見学した後、特別展「歌川（安藤）広重 東海道五十三次」を拝見して一日目の研修の幕を閉じました。

翌日は、高山市内のさまざまな博物館を見学してまわりました。最初に高山短期大学・飛騨自然博物館を見学し、小野木三郎学芸員の説明を受けました。飛騨地方の自然についてわかりやすい解説をいただき、参加者一同熱心に聞き入っていました。次に飛騨高山まつりの森へ向かい、担当学芸員糸田尚氏の案内で高山祭ミュージアム、ちょうの館、茶の湯美術館を見学しました。各施設それぞれの展示内容にボリュームがあり、今回の研修では時間が足りないのが遺憾でした。

昼をはさんで、最後に飛騨・世界生活文化センターを見学しました。ミュージアム温故

知新では、各セクションごとにそれぞれの担当学芸員から解説を受けました。オープンしたての真新しさだけでなく、展示内容や方法にも斬新さが目につき、興味深いものでした。



飛騨・世界生活文化センターにて  
(機関紙委員 飛騨民俗村 岩田 崇)

### 第90回岐阜県博物館協会公開講座報告

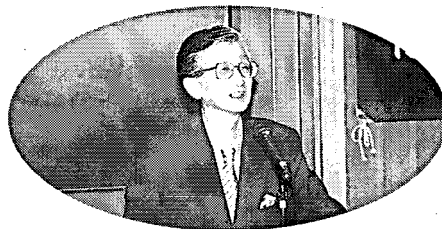
「市川団十郎と江戸の歌舞伎」

期 日：平成13年10月7日

場 所：岐阜県博物館

講 師：服部幸雄氏（千葉大学名誉教授）

参加者：80名



第90回の公開講座は、岐阜県博物館秋季特別展「七代目団十郎と国貞・国芳」に関わる特別講演会に協賛する形で行われました。千葉大学名誉教授の服部幸雄氏を講師にお招きし、「市川団十郎と江戸の歌舞伎」という題目で講演をしていただきました。

歌舞伎役者が「何代目」と表現して名を継ぐ習慣など、江戸の歌舞伎の世界を大変わかりやすく解説していただきました。また、八代目団十郎は美男で独身で大変人気があり、花道のそでで使ったちり紙を婦女子が奪いあってお守りにした話や、桶の水に浸かったとき、その水は小分けして化粧に使われた話など、数々の逸話を大変楽しく紹介されました。さらには、歌舞伎などの伝統芸能の殿堂である国立劇場の役割について、特殊法人の民営化の方向がもたらす影響等についても言及されました。

興味を引く豊富な内容で、参加者のだれもが熱心に耳を傾けていました。

(機関紙委員 岐阜県博物館 古田靖志)

財団法人 岩仲奨学会 お数珠館

〒501-6241 羽島市竹鼻町狐穴  
TEL 058-392-3111



世界でも珍しい数珠の美術館「お数珠館」が誕生しました。こちらでは、財団法人岩仲奨学会理事長、岩田仲雄氏が収集され、奨学会に寄託された数珠300点ほどが展示されています。

数珠は棕櫚・菩提子・胡桃といった木の实、草の実、果物の実からできた珠や宝石、象牙、石、貝、ガラスなどでできた珠までいろいろあります。彫刻もいろいろで花彫り、羅漢彫り、透かし彫りなどと工夫されています。中には見とれてしまう細工もあり楽しく鑑賞することができます。

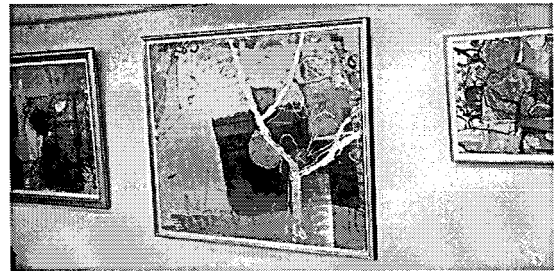


数珠を収集されるようになった動機についてお聞きしました。岩田氏のご尊父がとても信心深い方で、弘法大師に助けられたことがあったなどのお話をされ、そんな家庭の中から自然と数珠などに親しみを覚えられたものと思われまふ。

仏様の意味とか教えとかいうとむずかしく

なりますが、静かに数珠を鑑賞することで何となく安らぎを覚えます。(私事ですが、私は自家用車のギアに数珠をかけてお守り代りにしています。その数珠に私の下手な運転を見守っていただいているような気持ちになっています。)

これらの数珠は、いままでに岐阜県博物館のマイ・ミュージアムや名古屋の日動画廊、尾西市の三岸節子記念美術館で展示をされました。あっちこっちに行っていた数珠たちがやっと安住の場を見つけたようです。



数珠の展示されている壁面にいくつかの絵画が掛けてあります。氏は、「先代の理事長のコレクションが多少あるので、いずれはこの奨学会に寄託していただき、お数珠館と絵画館とを一緒にやっていきたい」と云っています。

また、氏は、「小さな小さなとても美術館と云えるものではないが、街の片隅に誰でも気楽にぶらりと訪れ、ひととき、心安まるものを得てもらえれば最高だ。それこそ、わが県の梶原知事が常日頃云われている街角美術館そのもの。」とも云われました。慶応大学の美学を専攻された氏のこれからの館運営に期待したいと思ひます。

【交通】名鉄竹鼻線 竹鼻駅より徒歩1分  
名神高速道路岐阜羽島ICより7分  
新幹線 岐阜羽島駅よりタクシーで7分

【開館時間】AM10:00～PM4:30

【休館日】土・日曜日・祝日

【入館料】無料

(機関紙委員 海津町歴史民俗資料館 瀬古尹宏)

会員各館のおもな企画展一覧(1～3月分)

施設名	企画展名	開催期間	休館日
岐阜県美術館	円空大貫展	1/8～2/3	月曜日*
	書くこと描くこと	2/13～3/24	
岐南町歴史民俗資料館	枅と秤	12/14～1/24	金曜日
	蓄音機とレコード盤	2/15～3/22	
岐阜県博物館	わたしの徳山 増山たづ子故郷の記録	12/23～2/3	月曜日*
	信長安土より来る	2/9～3/10	

日本土鈴館	全国干支展(馬)	11/3～2/28	無休
	全国雛人形展	3/1～4/6	
美濃加茂市民ミュージアム	第18回岐阜県移動美術館「川崎小虎～暖かみあふれる自然の情景～」展	2/9～3/24	月曜日 2/12, 2/26
ミュージアム中山道	東濃養護学校生徒作品展	2/13～3/1	火曜日
光記念館	浮世絵の魅力 江戸の春に夢見る	1/14～3/10	月曜日
飛騨民俗村	土びな展	3/1～4/3	無休

\*:月曜日が祝日または振替休日の場合はその翌日